

福音の少年 外伝

ファイアワークス

火花が、星空を覆いつくしていた。砂漠の寒い夜だったが、隕石孔に蓋をするように建造された『砦』の屋上にあるヘリポートには、数百人の魔法使いと魔女たちがいた。何組かは、腕を組んだり、肩を抱き合ったりしていた。『砦』で新年を迎える職員は、約一五〇〇名。通常の半分強といったところである。

ジェームス・ブリティッシュ、魔法使いの最高位『ウイザード』の一人である金髪の白人青年は、ヘリポートの隅に一人で立って、ぼんやりと、空から降ってくる様々な色の火花を見上げていた。普段は気さくな人物なのだが、今日はなぜか人を寄せ付けない感じがした。彼に思いを寄せている何人かの魔女たちは、遠巻きに彼の事を見ていたが、話しかけられないでいた。

グエン・ティ・マイ・ランも、そんな魔女たちの一人だった。彼女は、黒に孔雀をあしらった冬物のアオザイ（ベトナムの女性用服）を着ていた。普段は束ねて巻き上げている黒く艶やかな髪を、背中の上のあたりまで垂らしていた。

ニュー・イヤール・イブのカウントダウンが始まるずっと前から、ウイズ・ブリティッシュの事はかり見していた。何を考えているのか、想像できた。そのいやな思い出を共有できるのは、『砦』にいる数多

くの魔女の中でわたしだけだ、マイ・ランはそう思った。だから、わたしが話しかけてもぜんぜん不自然じゃない…むしろ、話しかけてしかるべきだ。

「楽しんでますか？ ウイズ？」マイ・ランは思い切って、話しかけてみた。

「…やあ、マイ・ラン」ウイズ・ブリティッシュはそう答えて、視線を下げた。ほんの一瞬、目の前のベトナム人の上級魔女を見つめている。

「…何か」ブリティッシュは何かを言いかけて、言葉に詰まってしまった。

「なんですか？」マイ・ランは首をかしげた。

「いや、ごめん。…よく似合うね」ブリティッシュは彼女の服を褒めた。

「ありがとうございます。…九十五年も終わりましたね」

「ああ。大変な一年だった」ブリティッシュは言った。その時、火花の音がした。彼は、そう言って目を逸らし、巨大な隕石孔が丸く切り取った輝く空を見上げた。

「あんな年は二度と来ないでもらいたいね」彼は言った。

マイ・ランは思わず世界で最も偉大な『ウイザード』の一人である若い男の横顔を見た。眉間にしわを寄せていた。

「ふ」マイ・ランは思わず笑い声を漏らした。あわてて右手を軽く握って口に当てて、咳払いだったように取り繕った。しかし、ウイズ・ブリティッシュは彼女の方に向きなおって、おかしいかい？と

間いかけてきた。険しい表情は消え、口元がゆるんでいるような気がしたので、ベトナム人の上級魔女は安心した。

「すみません。マイ・ロード、つい、普段とあまりに違うから」
マイ・ランは言った。

「ああ、そうだね。ちょっと、今日は…花火のせいかな？」プリティッシュは独り言のように言った。

「花火？」そう言っただけで、首をかしげた。

その時、ひととき大きな花火が彼らの頭上で炸裂した。しばらく遅れて、どーんという音が空から降ってきた。光の雨が、五万年前に落ちてきた巨大な隕石が大地をえぐった傷跡をいやすように、ゆつくりと降ってきた。

「…グノーシス派の言葉のひとつに、『神は宇宙の火花だ』というのがある」ウイズ・プリティッシュは低い声で言った。

「目の見えない神が造った不完全な物質世界に飛び散った火花ですね」マイ・ランは言った。

ウイズ・プリティッシュは、マイ・ランをふたたび見た。

「マイ・ラン…もし」プリティッシュは言いかけた。そのとき、二人の目の前に青白い人型の光が現れた。

「マイ・ロード、ジヨブズ報道官が呼びです」その電子精霊は言った。

「…ああ、すぐ行く」プリティッシュはそう答えて、大股でエレベ

ータに向かつて歩き出した。ところが二三歩進んだところで、肩すかしされたように立っているマイ・ランに振り返って、「マイ・ラン、よければ、あとで部屋にこないか」と言った。

返事もする間も与えてくれなかった。ウイズ・プリティッシュはそのまま、背を向けて歩み去ってしまったのだ。後には当惑するアジア生まれの上級魔女が残された。

マイ・ランはあわててヘリポートから立ち去ろうとしたが、何人かの同僚の魔女たちに捕まってしまった。

「なに話してたの？」

「ずいぶん仲が良さそうだったじゃない」

「デートに誘われたの？」

彼女たちは、マイ・ランを取り囲んで質問を浴びせかけた。

「なんでもないってば！…ほら、去年の事件の事を話してたのよ」
マイ・ランはそう言いながら彼女たちを振り払い、エレベータに乗った。

頭の中で打ち上げ花火が爆発したみたいだった。たしかに、『ウイズ・ロード』は、『あとで部屋にこないか』と言ったわよね？ 何度も心の中で反芻してみる。…あとで、部屋に、こないか。

「おっと」

「ご、ごめんなさい！」

「考え事をしながら歩くのはあぶないよ」

「すみません！」

彼女はフォート・ローエル名物の長い廊下で、保安部の魔法使いとぶつかりそうになった。

とにかく、自室に戻ろう、と思った。この皆全体がいわば家族のようなものだ。誰かにべらべらとししゃべってしまう前に、わたしの部屋に戻らなければ、と思った。

部屋までの距離が恐ろしく長く感じられた。

ようやく、ドアを開け、ベッドの上に横になった。目を閉じる。

彼の部屋に行くということは、二人きりになるということだ。当たり前である。

その当たり前の事が、ひどくわたしを動揺させるのだ。

マイ・ランは去年の『事件』の事を思い出した。

あの屋敷の中では、ずっと二人きりだった。実質的には。なぜなら、ステパン・ヤロシクは屋敷に入らず、フロリダ州警察とともに、ずっと『外』にいたのだから。あの不愉快な魔法使いを畏にはめるために。

何も知らない『彼』は、天井に張り付いて、三人のうちの誰かが一人居りになるのをじっと待っていたのだ。『彼』はヤロシクに化した電子精霊エアリエルを玄関先で殺し、いや、殺したつもりになって、チェコ人の魔法使いに変身して帰ってきたのだ。『彼』が『彼』ではなく『彼女たち』だったという唯一の問題を除くと、計画はうまくいったのである。

だが、あれを二人きり、とは言わない。

ブリティッシュに化けた『彼女たち』が、電子精霊エアリエルが化けた自身とキスしているとき感じた動揺を、マイ・ランは思い出した。いくら油断させるためとはいえ、自分から手を回すのはやりすぎだ、

と思った。この畏を考えたステパンをにらみつけると、大柄なチェコ人の魔法使いはわざとらしくウインクをしたのだ。今度はそのではないのだ。あんなキスをするようになって、偽物同士では、ないのだ。

グエン・ティ・マイ・ランは目を閉じた。

『ウィザード』といっても、普通の若い男にすぎない。そう思うことにした。男の子に部屋に来ないか、と誘われただけで、なぜわたしがローティーンの女の子のように、そわそわしなければならぬのか。そう思うことにした。

テレビの中で、『ウィズ・ブリティッシュ』は微笑みながら、全世界へのメッセージを読み上げている。世界魔法管理機構が毎年行っている、六人の『ウィザード』の新年の挨拶の衛星中継だった。不治の病に冒されていると噂されているワン大人の感動的なメッセージの後に、ブリティッシュの番がやってきたのだ。五人の老かいな魔法使いたちに混じっていると、ブリティッシュはいかにも「若造」という感じがした。

マイ・ランはシャワーを浴び、着替えてからテレビを観ていた。

おそらく彼は明け方近くまで忙しいのだろう。彼の部屋の前で待っている？ 冗談じゃない。彼女は、この『砦』にある『ウィザード』の特別室の事を思いだした。

突然、彼女の部屋の電話が鳴った。

マイ・ランは思わずソファから飛び上がって、受話器を取った。

「プリティッシュュだ」低い声が言った。

「はい」マイ・ランは答えた。

「ようやく、ジョブズから解放されたよ。…今から来られないかい？」

「…え、ええ…ただちに」

『ただちに』なんて、間抜けな台詞だと思った。しかし、ともかく行かなければ、彼女は立ち上がり、自室を出た。

そのドアには、ただ「Wizard」と書かれてあるだけである。それで十分なのだ。端から端までおおかた二キロもあるだろうかという巨大な施設に Wizard と呼ばれる人間は一人しかない。

ライオンの頭部をかたどった真鍮のドアノックカーに認証用の魔法がかけてあった。そのライオンは目をきよるきよるさせて、MGMのトレードマークのように二度吠えた。

『認証は済んだ。入ってよい。上級魔女グエン・ティ』ライオンは言った。

マイ・ランは部屋の中に入った。

広大な、と言っているような部屋だった。暗い緑色のカーペット

の上をゆっくり歩いた。いったい、何部屋あるんだろう、とマイ・ランは思った。一番奥の書齋らしき部屋に人の気配がした。中に入ってみた。ウィズ・プリティッシュュが、大きな机の向こうに、たった一人で座っていた。ウィズ・プリティッシュュは大きな肘付きの椅子に腰掛けて、壁を覗いていたが、彼女の方に向き直り、「ああ、ごめん」と言った。迎えに出なかったことを謝っているつもりらしい。マイ・ランはどう言っているのかわからなかったので、軽く会釈することにした。

壁に映っていたのは、『ソーサラー・ブリンクマン』だった。

エアリエル電子精霊が映した驚くほど鮮明な映像だった。頭髮の薄くなった、

丸顔の、平凡な白人男性が画面の奥から手前に向かって走ってくる。

必死の形相だった。何度も何度も後ろを振り返っている。

曇り空、昼間の草原だった。

突然、その男の体全体が巨大な影に覆われた。ブリンクマンは後方に向かって何か叫んだ。次の瞬間、その男の体は炎に包まれた。

燃え上がる、というより細長い炎の槍が、十字に交差して男の体を引き裂いたかのようなだった。オレンジ色の光輝の中、一瞬で肉は燃え尽きて、黒い骨になった。

黒い骸骨は惰性でよろよろと歩こうとして、崩れ落ちた。その骨に向かってさらに新たな火の矢が突き刺さった。その火の勢いで、頭蓋骨が砕け散った。

画面がゆっくりとパンしてゆき、空中に浮かんだ巨大なドラゴンを捉えた。口の端から小さな炎が立ち上っていた。

「…音声は消されてるんだ」プリティッシュはつぶやくように言った。

「たぶん、最期に、プリנקマンは、命乞いをしたんじゃないかな」マイ・ランは黙っていた。

「フロリダでおとなしく州警察に捕まっていたらよかったんだ！…わざわざ『学長』のテリトリーに飛び込むから…」プリティッシュは言った。

ジェームス・プリティッシュが『学長』と呼ぶ人物はただ一人しかない。マイ・ランにはわかっていて、もう一人の『ウィザード』にして、ドイツにある魔法アカデミーの学長イグナツ・シエルナーのことである。

面と向かつては決してそう呼ばないが、親しい人の前ではウィズ・シエルナーの事を『学長』と呼ぶことがあると、マイ・ランは先輩の魔女から聞いていた。

映像は終わり、ぼんやりとした四角い光が白い壁を照らしていた。マイ・ランは、ふとウィズ・プリティッシュがこの映像を観るのはいったい何回目なんだろう、と思った。ほとんど毎日のように観ているのではないだろうか。しかし、なんとなく、本人に確かめる気はしなかった。

「何か、飲むかい？」プリティッシュは立ち上がり、ホーム・バーの前まで歩いて行った。

何も飲みたくなかったが、何もいらないと答える気がしなかった。マイ・ランは軽いカクテルを頼んだ。プリティッシュは器用な手つきで、果物ナイフでライムを切り、グラスの端に刺している。

しばらく、二人は、たあいのない世間話をした。

突然、プリティッシュの口調が変わったとき、マイ・ランは思わず身を固くした。来るものが来たと思った。わたしは『ウィザード』に口説かれるのだ、という実感がはじめてわいてきた。

『そんなとき、女は、だまって目を伏せているものよ』、古風なベトナムの女だった母の言葉を思い出した。母もたぶん祖母からそう言われたのだろう。もちろん、祖母も祖母の母からそう言われたにちがいない。だが、マイ・ランはまっすぐにプリティッシュの顔を見つめた。

ところが、ウィズ・プリティッシュの口から出てきたのは、予想もしていなかった言葉だった。

「…マイ・ラン、実は、お願いがあるんだ」プリティッシュはおずおずと切り出した。

お願い？ マイ・ランは次の言葉を待った。

「ぼくを、『リーディング』してくれないか？」彼は言った。

「『リーディング』？ 『リーディング』って、なにを？」マイ・ランはびっくりした。

「だから、ぼくをだ。ぼく自身を、ぼくの魂を探查してみてくださいないか？」ウィズ・プリティッシュは言った。

「何を、突然。…個人の精神を『リーディング』しろって、おっしゃるんですか？」

「そうだ。…本人が了承していれば、規則違反ではない。それは安心してくれ」

「それは知ってます。でも、なぜ、そんなことを…」

「…プリンクマンだ。ぼくは、あの映像ばかり観てしまう。プリンクマンが『学長』の召還した火竜に焼かれる映像を。一日に何度も。

観るたびにいやな気持ちになるんだが、やっぱり観てしまうんだ。

…ぼくは、自分がなぜあれに惹かれるのか、それが知りたい」

マイ・ランは、全身に冷たい水を浴びたような気がしていた。

彼女は冷静に、こう言った。

「…せっかくですが、マイ・ロード、そうした心の問題はカウンセラーに」

「だめだ」ブリティッシュはマイ・ランの言葉をさえぎった。「ぼく

は、カウンセラーというものを信用できないんだ！あ…いや、言葉が過ぎたな、ぼくのような立場の人間が気軽にカウンセリングを受けることは難しいんだ。…わかるだろう？」

ブリティッシュはそう言って、ベトナム人の上級魔女を見つめた。

マイ・ランはうなずいた。わかったつもりになった。最高指揮官がカウンセリングを受けているというよりも、若い魔女を部屋に招いているという方が、士気への影響が少ないというものだ。ウィズ・

ブリティッシュが言いたかったことはたぶん微妙に違っただろうが、

そう思って自分を納得させることにした。

「もちろん、これは命令じゃない。プライベートなお願いだ。きみは『皆』では『リーディング』の第一人者だ。…頼むよ」マイ・ランにとっては断りようのない口調で、ウィズ・ブリティッシュは言った。

マイ・ランは、部屋から取ってきた携帯用直感発振体タリスマンを、ブリティッシュの目の前にかざした。フロリダ、半年前の、あの魔法使いの別荘を思い出した。今度は場所ではなく人物の、それも『ウィザード』を『リーディング』するのだ。

人間に対して行うのは、初めてではない。魔法アカデミーに専門の講座があるほどで、その行為そのものは治療に使われることがある。マイ・ランもアカデミーの実習で、同じ年の魔女の『リーディング』をしたことがあった。

だから、なんの問題もない。はずだ。

「いつしよに、来ますか？」マイ・ランはブリティッシュに向かって言った。

「むろん、そのつもりだったよ」彼は答えた。

マイ・ランはうなずいた。意識のすべてを目の前の金髪の白人男性に集中した。やっぱり、ウィズはハンサムだわ、心のどこか自分がそう言った。だめだ。集中しなければ。

二人は突然、ヴィジョン 幻覚の中に入った。

優秀な『リーダー』が作り出す、人間の精神に対する『リーダーング』の世界は、ほとんど第二の現実のように感じられる。そして、グエン・ティ・マイ・ランは『皆』のみならず世界でも上位に位置づけられる『リーダー』だった。

二人は、美しい芝生の上にあった。どこか、ヨーロッパの公園のようだった。気持ちのいい日だった。そよ風の感触すら感じられた。

「ここは…ぼくの生まれた家の近くの公園だ」ブリティッシュは言った。

「あなたが、導いてください、マイ・ロード」マイ・ランはブリティッシュに言った。

「…どうすればいい？」ブリティッシュは幻影の中で言った。彼の背後の公園の樹木の向こうに、書齋の本棚が透けて見えた。

「リラックスしてください。行きたいところのことを考えて…あなたは、たぶん、行き先を知っています。わたしはその思念を拾い上げます」マイ・ランは言った。

「わかった」ブリティッシュは言った。

そのとき、公園の芝生の上に、奇妙な集団が見えた。黒い背広を着た男たちと、黒のメイド服を着た女たちの集団が走ってくるのだ。

その集団の先頭に、小さな男の子がいた。金髪を振り乱して、懸命にその集団から逃げているかのようにだった。待つんだジミー、ジミー待って、彼らは口々に叫んでいた。だが、その男の子は走ることをやめない。

その子は、マイ・ランの足下を通り過ぎて、ブリティッシュの書

齋の壁の向こうに消えた。ブリティッシュが幻覚ワシジョンの中で一歩足を踏み出すのが感じられた。マイ・ランもその方向について行った。

潮の香りがした。遠くから、カモメの鳴き声が聞こえる。波が打ち寄せてくる。赤っぽい砂の上に、二人は立っていた。陽光が降り注ぐ、どこかの海岸だった。感傷的な音楽がなっている。屋台が並んでいる。ホットドッグのにおいがする。ブリティッシュは、一軒の店の前で止まり、棒のついたキャンディを手取る。

「これが『ブライトン・ロック』だ。こんなものが、この名物なんだ」その声は『リアル』でも発せられたのかもしれない。マイ・ランはブリティッシュの声に不思議な感情がこめられているような気がした。悲しみと達成感とが混じったような。

「見て」ブリティッシュは沖の方を指さした。

観光用の棧橋が海に向かってのびていた。棧橋の上には遊園地が建っているようだった。観覧車や、ジェットコースターが見えた。音楽はそこから潮風に乗って流れてくるのだ。

「あれが、『パレス・ピア』だ」ブリティッシュは言った。

マイ・ランは黙ってうなずいた。いったいここがどこなのか、そもそも地球上のどの国なのか、確信はなかった。だが、突然回答が空から降ってきた。…たしかウイズ・ブリティッシュはその名の通りイギリス生まれ。ああ、そうか。自分で言ったじゃない。『ブライトン・ロック』と。ロンドンの南の観光地だ。ブライトン。

「ぼくは、パレス・ピアあそこに行きたかったんだ」ブリティッシュはつ

ぶやいた。

とたんに、その世界が翳った。青空が一瞬にして灰色の雲に覆われた。海の色が青から鉛色に変わっていく。冬のプライトンだ。

「すぐ近くに住んでいるのに、行けなかつたんだ。行ってはならなかつたんだ」ブリティッシュは言った。

「なぜ？」マイ・ランは、思わず言葉で問いを発してしまった。

ブリティッシュはマイ・ランを見つめた。その長身の白人男性の腰のあたりに、さつき公園で走っていたジミーという幼い男の子の姿が重なっていた。

「ぼくが、かいぶつだからさ」男と、男の子が言った。

ふたたび、背景が変わった。大きな屋敷の大きな部屋。ひとつしかない窓の両脇に背広を着た男が二人、立っている。

テーブルがある。小さな男の子が座って、マフィンを食べていた。

ぼろぼろと半ズボンの上にマフィンのかけらをこぼしている。彼の後ろに、黒い服を着たメイドが二人立っている。

「彼らはみな魔法使いなんだ」ブリティッシュの声がひびいた。

「え？」

「彼らの役目は、ぼくを監視すること。一般の人に危害を加える前に、ぼくを遮蔽魔法で封じ込めるために彼らがいる」ブリティッシュの声がした。

「…これは、何歳のころだろうか…六人がかりだから、四歳のころかな？…七歳までに最大で十人程度になつたような気がする」ブリ

ティッシュは言った。

マイ・ランはブリティッシュの端正な顔を見つめていた。彼は、懸命にお菓子を食べる幼い自分自身を見下ろしていた。

「…さすがに、十歳くらいになれば、彼らはいらなくなつたよ」自嘲するように彼はつぶやいた。

「ウイズ・ブリティッシュは、ほとんど生まれてすぐに魔法使いの素質が発現し、天才ぶりを発揮した」今では当たり前のように、そう教えられている。マイ・ランは思い出した。その点では、遅咲きの努力の人、イグナーツ・シエルナーとは対称的であるとも言われていた。

同じ天才少年でも、暗算の天才と魔法の天才とでは、物理世界に与える影響が違いすぎる。幼児らしいいたずら心で「ウイザード」級の魔法を使われたとしたら、その子どもは、周囲の大人たちにとって、もちろん、両親にとつてさえも、「災厄」以外のなにものでもないだろう。

「…興奮すると、つまり、我を忘れるように楽しいことや、面白いことがあると、つい魔法が出てしまうんだよ。だから、ぼくは決してパレス・ピアに行けなかつたんだ」ブリティッシュは言った。

「すっかり思い出したよ…他の子どもと遊べないことは、そんなにつらくなかつたんだが、『パレス・ピア』に行けないのはつらかつた。だだをこねて、周りのものを困らせたらしい」

また風景ががらりと変わった。二人は風の強い丘の上にあった。眼

下にイギリスらしい田園風景が広がっている。

「デビルズ・ダイク(悪魔の堤防)の意)だ。ぼくはよくここで時間を過ごした」彼は言った。

その時、マイ・ランは気がついた。公園も、海岸の行楽地も、風光明媚な丘も、お付きの人以外の人影がみあたらない。おそらく、幼いブリティッシュユが行く前に入念に人払いをしておくのだろう。それは、どんな子ども時代だったろう！多くの兄弟とともにぎやかな家庭で育ったマイ・ランには想像ができなかった。

彼女は、ブリティッシュユを見つめた。

「ただ、わたしたちは、答えを見つけてはいない。」

「マイ・ロード…」彼女は思いきって言うてみた。「思い出したくないのは、わかります。でも」

「わかつてる。…もちろん」彼は言った。そして、青い目をゆっくりと閉じた。

オレンジ色の光が爆発するように目に飛び込んできた。マイ・ランは思わず目を細めた。二人は夜の海岸にいた。

「え…！」マイ・ランは思わず声を上げた。目の前でパレス・ピアが炎上しているのだ。木製の観光用桟橋の上に立っている、木造の瀟洒なパビリオンが燃え上がっていた。火の粉が暗い海に向かって舞っていた。まるで花火のようだった。ぱちぱちとはぜる音まで聞こえてきた。

「あれは…パレス・ピアじゃない。よく見てごらん」ブリティッシュ

ユは言った。

マイ・ランはブリティッシュユの指さす方を見つめた。燃え上がるピクトリア調の古めかしい建物に看板が掛かっているのだ。それは赤い字でこう書いてあった。

「WEST PIER」

「ウエスト・ピアだ。ブライトンにあるもう一つの桟橋なんだ。燃えているのは十九世紀からある古いパビリオンだ」ブリティッシュユは言った。

「なぜ…」マイ・ランはその時、炎に照らされる夜空に、何かが飛んでいるのに気がついた。コウモリのような羽で、燃え上がる建物を中心に旋回するようにはばたいている。

ドラゴンだった。だが、ウイズ・シエルナーが召還するような恐ろしい竜の姿ではなかった。身体は青と緑の縞々模様、翼はくすんだピンク色、顔はまるで細長いカバのような愛嬌のあるドラゴンだった。そんな絵本から抜け出してきたような巨大なドラゴンが、飛び回っている。時折、大きく裂けた口を開けて、月のない空に向かって炎を吹き出しながら。

「『パフ…』」ブリティッシュユはつぶやいた。

マイ・ランは思わず振り返って、ブリティッシュユの顔を見た。彼はそのドラゴンを悲しみに満ちた目で見上げていた。

突然、空を飛ぶドラゴンが吠えた。まるで犬の遠吠えのように。マイ・ランは見上げた。燃え上がるパビリオンからいくつもの光の筋が伸びて、その竜を貫いていた。ドラゴンは空中で激しくもがい

ている。

「ノー！ ノー！」遠くで幼い男の子の叫ぶ声がした。

次の瞬間、光の筋はそのドラゴンを引き裂いた。哀れな竜は、空中でバラバラになり、燃え上がった。そして、ゆっくりと火事でオレンジ色に照らされた海に向かって落ちていった。

同時に、燃える棧橋の炎が一瞬にして凍り付いた。おそらく魔法だろう。棧橋の方から何人も、口々に叫ぶ声がした。暗い海岸に、ブリティッシュとマイ・ランは二人で突っ立って、黒い骨組みを残したパピリオンを眺めていた。

マイ・ランは待つていた。ブリティッシュが口を開くのを。

「…クリスマス・イブだったんだよ。今夜は…。ぼくの両親は、普段使われていないウエスト・ピアを借りきって、ぼくのためにパーティーを開いてくれたんだ。大きなダンスホールを掃除してね。でっかいツリーや、飾り付けや。みんな年上だけど、子どもの魔法使いたちも招待されていたんだ」

ブリティッシュは、言葉につまった。しばらく間があった後、ふたたびしゃべりだした。

「…厳戒態勢だったみたいだね。実は。だが、彼らはあんな事態が起きるなんて予測できなかった。当たり前だ。ぼくだって、そんなことになるなんて思わなかったんだ」

ブリティッシュは言葉を続けた。

「…その人のことをみんな、『フレディーおじさん』と呼んでいた。

だから、ぼくもそう呼んでいたんだ。サンタクローズの扮装をしたフレディーおじさんは、わざわざニューヨークから来て、ぼくにプレゼントをくれたんだ」

グエン・ティ・マイ・ランにある直感が訪れた。そうだ。もちろん、そうなのだ。

「彼はぼくに、『パフ』を召還してみせたんだ」

そう、まさにこんな夜、このような子どもを喜ばせるために招かれる、召還系の魔法使いだっただ。

「ぼくはおおよろこびだった。大好きな歌だったし、絵本も持っていたから…だが、ぼくは愚かだった。今でも愚かだが、その時はもっと愚かだった。ぼくは『パフ』に炎を吐いてほしかったんだ。…ぼくは、召還されたドラゴンにもう一度魔法をかけた。周りの大人が制止する前に」

「フレディーおじさん…フレデリック・ブリンクマン」マイ・ランは言った。

「そうだ。彼はひどくあわててドラゴンを止めようとした。無理だった。ぼくの魔法が強すぎたんだ。『パフ』は狂ったように炎を吐き散らして、飛び去った。…幸いにも、数名軽いやけどをおっただけで済んだのは、招待者やスタッフが魔法使いだっただからだ。だけど『パフ』は…」

マイ・ランはいきなり幻覚の世界を閉じた。間接照明でぼんやりと照らされた大きな書齋に、ウィズ・ブリティッシュと向かい合っ

て立っていた。彼女は、目の前の若い男を見つめていた。ある感情が、無視できないある感情がわいてきた。それを抑えて、彼女は言った。

「ウイズ・ブリティッシュ。あなたは、このことを半年以上前に思い出してましたね？」

ブリティッシュは、否定も肯定もせず、黙って、立っていた。

「だとすると、なにもかも、つじつまが合いません。あなたは『ウィザード』です！ あなたがあの日、あの別荘の前で、『プリンクマンをソーサラーと認定する』と宣言すれば、それですべては終わっていたんです！ そして、いきなり屋敷ごと焼き尽くしても、もちろん、十五人の女性たちもろともプリンクマンを焼き尽くしても、一般人の法律上、魔法管理機構の規則上、なんの問題もなかった！」

ブリティッシュはかすかにうなずいた。

「だけど」マイ・ランは叫ぶように言った。なぜか、目の前のブリティッシュが滲んで見えた。「だけど、あなたは、わざと彼に一般人の法律を犯すようにしむけた！ ステパンに命じてあんなトリックをしかけた…プリンクマンを州警察に逮捕してもらいたかったから！」

ブリティッシュは答えなかった。

「答えてください…お願いだから！」マイ・ランは言った。気がつくくと、自分の頬に何かが流れていた。

ブリティッシュは、目の前の上級魔女にそっと近寄り、肩に手をかけた。

「マイ・ラン、ぼくは…」

「触らないでください…あなたは、ソーサラー・プリンクマンの命を救いたかったです。わたしと、ステパンを利用して」

「すまない…マイ・ラン」

マイ・ランは、肩にかかっているブリティッシュの手を払いのけた。

「謝る必要などありません。どんな動機から出ていようと、命令は命令なのでから」

彼女は、ウイズ・ブリティッシュに背を向けた。

「…とにかく、『リーディング』はしました。…もう、自室に戻ってよろしいですか？」

「…ありがとう。マイ・ラン」後ろからウイズ・ブリティッシュの声が出た。

「このことは、誰にも言いません。…ご心配なく」マイ・ランはそう言っ、部屋を出て行った。

数日後。

上級魔女グエン・ティ・マイ・ランは、砂漠の真ん中にいた。遠くにフォート・ローエルの山脈の大きな影が見えた。ヘリポートを照らすサーチライトが、山火事のように見えた。

夕闇が迫っていた。わずかな灌木の茂みを見つけた彼女は、バックパックを降ろして、砂の上にバンダナを敷きその上に座った。

冬の砂漠は寒かった。早く、火を熾さなければ。彼女はたき火の

準備をした。

指を鳴らす。かすかな炎の魔法をかけられた枯れ木がぱつと燃え上がった。

オレンジ色の炎が、澄んだ空気の中で冷たく輝く星空の下で、ゆつくりとゆらめいた。

燃える木製の棧橋を連想した。あの時、すぐそばにいた男はいない。砂漠の真ん中に、彼女一人だけだった。ふと思いついて、バックパックを背負い、箒に飛び乗って、『皆』から飛んできたのだった。

マイ・ランは、携帯用直感発振体タリスマンを取り出した。なぜかうまくいくような直感があった。

彼女はたき火に向かってそれをかざし、『リーディング』を行った。それは『火』、荒野で熾されたたき火に対する『リーディング』だった。

数分間、何も見えなかった。だしぬけに、反応があった。おそろしく古い大地と炎の記憶の中

に、それはいた。彼女はその存在に話しかけるようにして、ヴィジョンの中に引っぱり出した。

それは、その存在は、ネイティブ・アメリカンの老人の形をしていた。たき火を挟んで正面に座っている。ホピ族（アリゾナの先住民族）たちの『神性』だった。

「…なぜ、ワシを眠りから目覚めさせるのだ？…玉蜀黍の肌を持つ

女よ」その存在はヴィジョンの中で、彼女に話しかけてきた。

「…問うためにです。古き神よ。誰にも相談できないことを相談したいのです」マイ・ランは言った。

その『神性』は、やれうるさい、といったふうには手を振った。

「そんなことは、お前の故郷の神にしる。なんでワシを頼る？」

「あまりにも故郷から遠く離れてしまいましたゆえ。お願いします、この地の神よ」

「…やれやれ、仕方ない。問いはなんだ」その『神性』は言った。

「…わたしは…」そこまで言いかけて、彼女はつまってしまった。どう表現すればいいのか、思いつかないのだ。

「さつさとしる。神をたたき起こしておいて、ぐずぐずするな。正直に言うことを言え」

そうだ。取り繕う必要などないのだ。相手は神なのだから。彼女は思いきって、こう言った。

「わたしは、ジェームス・プリティッシュを愛するべきでしょうか？」

こうして口に出すとひどくバカバカしい問いだった。案の定、目の前の『神性』は機嫌を悪くした。その証拠に、老人だった顔が、鼻になったり、ガラガラ蛇になったり、ネズミになったりした。

「…しばらくみないうちに、人間の女はこんなにも馬鹿になったのか！…そのジェームスナントカが何者か知らんが、自分の心のことをなんで他者に問う？…ところで、そいつはお前さんを愛しておるのか？」

「え、…ええ、たぶん」マイ・ランは答えた。そう答えることによつて、すべてが、はつきりと見えてきた。あれが、愛の告白でなくてなんなのだろう？ たしかにあれば、ちょっといびつで、不器用で、卑怯で、ずるい愛の告白なのだ。そのずるさも、子どもっぽいずるさなのだけだ。

「ならば、何の問題がある？ 周囲など、どうでもよい。あとは、お前さんがそれを受け入れることができるかどうかだけの問題だろう？」『神性』は野牛の頭で言った。

「ええ、仰せのとおりです。わたしが受け入れられるかどうか、です。…ありがとございます。とても楽になりました」マイ・ランは率直に言つて頭を下げた。

『神性』はちよっぴり機嫌を直し、老人の顔に戻つた。少しおしゃべりをしたくなつたらしい。マイ・ランに向かつてこう言った。

「…愛するだのなんだの、のんきなことだな。おまえたちの世界が滅びようとしているのに」

「え？」マイ・ランは問い返した。

『第一の世界』は火によつて滅ぼされた。ほれ、あの『神性』はフォート・ローエルを指さした。

「あそこに、天から大きな火が降つてきて、大地を焼き、疫病をまき散らして『第一の世界』を滅ぼした。いま、お前たちは大いなる火の落ちてきた跡に、ああして作った火をともしている。だが永劫に続く世界などない。時は巡るのだ」『神性』は言った。

マイ・ランはフォート・ローエルの方角を見た。五万年前の隕石

によつて出来た大地の疵跡を塞ぐようにして、世界を支配する建造物が建てられていた。そしてそれは星々に向かつて、幾筋もの長い光を放つていたのである。

文字通り神のごとき視点から見ると、人間の営みはみな、火で作られた寄せ木細工に見えるのだろう。

Fireworks. . . そんな言葉が浮かんだ。

ファイアワークス

人間の作つた花。火も、魔法使いを焼き殺す炎も、燃える桟橋も、

サーチライトも、みな。

ふと気がつく『神性』は消えていた。彼女は注意を逸らしたために、おぼろげなその存在を支えるものが無くなったのだ。

上級魔女グエン・ティ・マイ・ランは、後始末をすると、箒に乗つて『砦』に帰つた。

『アレキサンドリア・プロジェクト』に参加するだつて？「ウイズ・ブリティッシュは怒鳴るように言った。

「正確には『アレキサンドリア図書館プロジェクト』です。マイ・

ロード」ウィリアム・ゲイツが横から口を出した。砂漠の一夜から一週間後の午後、ブリティッシュの執務室での出来事である。

『アレキサンドリア・プロジェクト』でいい！ みんなそう呼んでいる。でも、なぜ？ あれは完了までに、何年かかるかわからない

んだぞ！」彼は目の前に立っている上級魔女に怒ったように言った。
 「応募してきた人員にもよるでしょうが、数年はかかると思いますが」
 マイ・ランは答えた。

「数年間、きみは世界中の遺跡をはいずり回って『リーディング』
 をしてまわることになるんだぞ」彼は言った。

「ええ。『砦』では、わたしは一番の適任者だと思います」マイ・ランは、ウイズ・ブリティッシュの青い瞳を見つめながら言った。

「それは事実だな」ブリティッシュの背後で、ゲイツがつぶやくように言った。

ブリティッシュは振り返って何か言いかけたが、途中でやめた。

「だが、なぜ？ …なぜ今志願しなければならぬんだ？」彼はマイ・ランにいきさつを聞いた。

マイ・ランは、軽く息を吸い込んだ。

「人類の明日のために、緊急かつ重要な仕事だと信じるから、です」彼女は言った。なおも、ウイズ・ブリティッシュは何事か言いかけた。青い瞳の中でいろんな感情がせめぎ合っている感じがした。わたしに泣いてすぎる、という選択肢は、その瞳の奥にあるのだろうか？ マイ・ランはふと思った。

「そうか…地道な仕事だが、がんばってくれ」ウイズ・ブリティッシュはそう言った。

それから何年間か、ブリティッシュの言ったとおり、上級魔女グエン・テイ・マイ・ランは、世界中の遺跡をあわただしく駆け回っていた。やるべき仕事は山のようにあった。九十九年のイラク紛争の前後一ヶ月はさすがに中断されたが、それ以外は、遺跡とその周辺のキャンプ地で、彼女は時間のほとんどもを過ごした。

時折、すっかり日焼けした額の汗をぬぐいながら、あの高い城に
 いる孤独な男のことを考えた。なぜ別の魔女を、いいえ、魔女でなくともいい、あなたと孤独を分かち合ってくれる別の女性をさがさないの。わたしが、修道院にでも行ったと思ってる？ 何度も来る手紙の返事にわざとそう書いた。

わたしは、あの歌をすっかりおぼえてしまった。知らず知らず口ずさんでいるという。

つらい仕事を終えた後、いつも歌っていると、同僚の魔女が言う。パフという魔法のドラゴンと、ひとりぼっちの少年を歌った古い古いフォークソングを。

完